式年遷宮に期待をかける―伊勢市

社団法人中部開発センター
客員研究員　青山　征人

はじめに

三重県伊勢市は、2013年（平成25年）に「第62回神宮式年遷宮」を迎える。遷宮とは20年に１度、伊勢神宮を構成する皇大神宮（こうたいじんぐう、内宮）と豊受大神宮（とようけだいじんぐう、外宮）や14の別宮の神殿のすべてを建て替え、ご神体に新しい神殿に移っていただく儀式である。1,320年前（持統天皇時代）に始められた神宮最大のプロジェクトであり、使用する御用材の切り出し行事や「お木曳」と呼ばれる行事など事前事業がすでに華々しく行われており、2009年11月に

2007年のお木曳行事の川曳。勇壮な掛け声と木遣り（きやり）唄につつまれた。公募の一日神領民も多数参加した。（伊勢市提供）

は内宮前の宇治橋が架け替えられる。地元伊勢市はもとより、三重県では遷宮を「観光立県」の絶好のチャンスと捉え、内外の観光客を呼び寄せるためのハード、ソフトを整備している。伊勢市ではまちづくりの指針となる総合計画を策定するとともに、最重要事項として「ご遷宮にむけた伊勢らしいまちづくり」を掲げ、都市整備、景観計画を進める。

古来、伊勢神宮は日本人の「心のふるさと」と親しまれ、全国各地から多くの参宮客を迎えてきた。江戸時代には「おかげまいり」という集団参宮が活発化し、1705年（宝永２年）、1771年（明和８年）、1830年（文政13年）とほぼ60年周期で爆発的なブームが繰り返し、宝永２年のブームでは、わずか50日間で362万人が参宮したと国学者の本居宣長は伝えている。日本の総人口が3,000万人強、しかも交通手段が未発達の中でこれだけ参加したのはまさに驚きだ。現在でも年間700万人以上の参宮客を集める聖地、日本有数の観光地に変わりはないが、海外渡航の活発化や各地に観光資源が増えたことで相対的に伊勢参宮への思いが時代とともに変わりつつある。そこで伊勢市を訪れ、現状と課題を探った。

Ⅰ　伊勢は歴史の宝庫

１　伊勢参宮は二見浦から

東海３県の住民なら２度や３度は伊勢神宮を参宮しているし、毎年正月三が日に初詣でする人も多い。筆者は10年前、住んでいる町の伊勢講の「代参」に選ばれ、名古屋駅から近鉄を利用したが、今回は道路アクセスを選んだ。二見浦を出発点とする正式な参宮ルートをたどりたかったのと、出来るだけ多くの神社、観光地を回りたいためである。鉄道アクセスならJR、近鉄とも１時間半だし、クルマでも東名阪自動車道と伊勢自動車道で２時間足らずで到着する便利さである。伊勢自動車道二見JCTで降りて国道42号線をものの５分も行けば二見浦。ここの海岸は古くから禊浜（みそぎはま）と呼ばれ、伊勢参宮をひかえた人が潮水を浴び、心身を清めてから外宮、内宮の順で参拝するのが習慣だった。白砂青松の海岸線が８㎞にわたって続き、古くから二見興玉（おきたま）神社(祭神は猿田彦大神)や大しめ縄を結んだ夫婦岩、神に供える塩を採取する御塩浜など、聖地として、また明治以降は国指定の海水浴場第１号として人気を博してきた。海岸線の松林を背に、切妻・妻入屋根の木造３階建て和風旅館やみやげ物屋が軒を連ね、昭和の雰囲気、面影を色濃く残している。修学旅行で宿泊し、枕を投げ合った経験の持ち主も多いと思うが、近年は大部屋で雑魚寝するのが嫌われてか、修学旅行客が減っているのが悩みだ。夫婦岩表参道の中ほどにある格式高い建物は賓日（ひんじつ）館。伊勢神宮に参宮する賓客の休憩、宿泊施設として神宮の崇敬団体・神苑会が1887年

伊勢参宮する人は二見浦の浜辺で、心身を清めた。夫婦岩は、鳥居の役目を果たしており、好天なら富士山が見えるという。

賓日館は、選び抜かれた材料とそれに応える職人の技が結集。日本の伝統建築の粋を見せてくれる貴重な建物。

（明治20年）に建てた。大正天皇が幼少時に３週間滞在されたのを始め、各皇族が宿泊され、その後、民間に払い下げられ、旅館として利用された。現在は資料館として活用され、NPO法人「二見浦・賓日館の会」が運営する。当時一流の建築家と造園家を動員し、選び抜いた材料と卓越した職人技を惜しげもなく投入した木造２階建て。堂々たる唐破風の玄関、120畳の桃山式大広間、輪島塗などで装飾された「御殿の間」など豪華なものである。伝統技術を学ぶ建築家や職人の見学が後を絶たない。

２　皇大神宮（内宮）の歴史は2,000年前

二見地区から国道42号と23号を30分走ると皇大神宮（こうたいじんぐう・内宮）と鳥居前町である。正式な参宮ルートは外宮からだが、今回は失礼した。内宮は天照大神（あまてらすおおみかみ）を祀り、ご神体は「三種の神器」の一つ、八咫鏡（やたのかがみ）である。皇室の先祖を祀り、天皇が直接祭祀を行う神社は日本中でこの神社だけ。720年頃に書かれた史書『日本書紀』によれば、11代垂仁天皇即位26年に五十鈴川の現在地に祀られたとあり、本当ならまさに2,000余年前ということになる。ご神体を安置する正殿は切妻・平入り、茅葺き、掘立柱建築の「唯一神明造」という、わが国最古の建築様式であり、縄文・弥生時代の高床式穀倉を大型にした建築物である。正殿のほか四丈殿、東宝殿、西宝殿とともに４重の垣に囲まれており、写真撮影は禁じられている。隣には20年ごとに建て替えるための同じ大きさの用地が「新御敷地」として用意されている。正殿や主要な建物を取り囲むように巨大スギやサカキ、クスノキなど常緑樹と落葉広葉樹が自然林を形成、神秘性をかもし出す。内宮を参拝した観光客は宇治橋を渡っておはらい町（旧参宮街道）に繰り出す。五十鈴川に沿って石畳の道を真ん中に両側に和風切妻の建物が軒を連ね、食事、みやげ物を提供する。その中心のおかげ横丁は、前回の遷宮時（1993年）に、「おかげ参り」の再来を願って整備したもので、9,900㎡の敷地に伊勢路の懐かしい家並を再現、組みひも、木綿、真珠、餅、貝のつくだになどを伊勢の老舗が販売する。中でも豪壮な建物で存在感を示すのはやはり赤福である。伊勢みやげとして５箱、10箱とまとめ買いする客が列を

宇治橋を渡ると内宮。なぜか気持ちが締まる。

内宮にいたる宇治橋の下を流れる五十鈴川。橋は2009年にかけかえるため、一部工事が始まった。

宇治橋前から五十鈴川に沿って土産物屋が連なる「おはらい町」。その一郭に伊勢の代表的な建築物を再現、移築した「おかげ横丁」。

成す。昨年10月、賞味期限改ざんが発覚して営業禁止処分を受けたが、今年１月から直営店を中心に営業を再開した。事件前に比べて、「売上高で70％まで回復しました」（同社広報課）とのこと。餅好きとしては喜ばしい限りである。

３　古市の賑わいをしのぶ

内宮を出て北上すると、森の中にルネッサンス様式の格調ある建物が見えてくる。神宮徴古（ちょうこ）館である。神宮の歴史と文化を紹介する博物館として1909年に建設された。設計は宮廷建設の第一人者、片山東熊の手による。1945年の空襲で収蔵資料ともども焼失したが、外壁をそのまま利用して再建された。神嘗祭（かんなめさい）を中心に、神宮の祀りと祭祀具、式年遷宮の装束神宝と呼ばれる調度品、おかげ参りや御師（おんし）に関する資料などを展示している。隣には神宮農業館があり、神宮御料地関係の資料や明治期の農林水産のありさまを展示する日本最古の産業博物館である。いずれの建物も国の登録文化財である。

博物館を西方にいった辺りの古い街道が伊勢街道と呼ばれる、内宮と外宮を結ぶ古市参宮街道である。長嶺と呼ばれるように昔は尾根伝いの険しい山道だった。両宮の中間に位置するのが古市。ここがかつては日本有数の歓楽街で、有名な古川柳に「伊勢参り大神宮にもちょっとより」とあるように、参宮を済ませた人々が精進落しの場所として利用した。天明年間（18世紀後半）には、妓楼70軒、遊女1,000人、芝居小屋３軒を数え、江戸の吉原、京都の島原、大阪の新町、長崎の丸山と並ぶ５大遊郭と称せられたほど。その一軒、油屋で起きた刃傷事件は「伊勢音頭恋寝刃」として今も歌舞伎で演じられる。残念ながら、第２次世界大戦時、津市や四日市市を爆撃した米空軍機が、伊勢の古市近辺でも爆弾を落とし、遊女お紺の墓がある大林寺などが被害を受けた。今では旅館「麻吉（あさきち）」と道際に残された道標、千姫の菩提寺である寂照寺、長嶺神社、後で建てられた古市参宮街道資料館に、かつての賑わいをしのぶことができる。

今回その麻吉を宿に選んだ。麻屋吉兵衛の頭文字を縮めて屋号にしたらしいが、どの時代に建てられたか、自分が麻吉何代目に当るか、を店主の上田由貴雄さん（75歳）は知らない。1782年（天明２年）制作の古地図『古市街並図』に麻吉の名前が掲載されていることから、これが正しければ創業220年ということになる。街道側から眺めると、一見２階建て商人宿風に見えるこの宿、実は上階から下まで６層からなる「懸崖造り」という珍しい様式。建物と建物の間に急角度の石段があり、途中に数坪の踊り場と、建物の玄関が設けられている。２つの建物は渡り廊下でつながっており、建物内部は階段だらけで、しかも廊下が入り組んでいる複雑な構造。部屋の境はふすまだし、部屋のガラス戸と畳の間を仕切るのは障子。そのすべてが黒光りかつすり減っており、とても100

神宮の祭典、歴史に関する資料を集めた神宮徴古館。ルネッサンス式の建物は国の登録有形文化財。

宿に選んだ古市の「麻吉」。石段に沿って建物が下へ下へと続く。古市界隈の往時の面影を伝える唯一の建物。

年前どころの建築ではないことが素人でも伺える。しかし最上階の大広間は絢爛豪華な造りで、芸者衆が奏でる三味線と伊勢音頭でドンチャン騒ぎを楽しむ参宮客の姿を彷彿させるのに十分だ。建物の下層部分と土蔵には当時の陶磁器や漆器、書付などを展示する資料館をしつらえ公開している。また複雑な構造の１室に、隠し戸と、そのまま山に抜けられる細道を設けた部屋があるとのことで、「昔は博打場も兼業していたのではないか」と上田さんは推察する。現在は夫婦と娘さん（女将）の３人で細々と旅館業を続けているが、お孫さんが大学卒業後に、板場修行をして跡を継ぐことになっており、その時を楽しみにしている。

４　豊受大神宮（外宮）周辺の活性化

参宮街道を西に下り、小田橋を渡るとまもなく豊受大神宮（とようけだいじんぐう・外宮）の神域となる。旧国道１号線を挟んで北側には市役所など行政機関やJR伊勢市駅、近鉄宇治山田駅及び商店街が建ち並ぶ中心街がある。外宮の祭神は豊受大御神（おおみかみ）。天照大御神の御神慮により、雄略天皇22年（西暦478年）に丹波国（京都府）から招かれたと『日本書紀』にはある。農業や養蚕を教え、衣食住全体を守る神として、内宮同様に崇められている。正殿は唯一神明造りで構造、規模とも内宮とほぼ同じだが、正殿に付属する東西の宝殿の位置、正殿の棟の鰹木（かつお

天照大神の食事を司るため内宮創建から500年後に迎えられたと伝えられる外宮。2013年に建て替えられる。

ぎ）の数などで少し異なる。樹齢数百年の杉並木や千古の森は内宮同様すばらしい景観を作っている。しかし伊勢市にとって悩みは外宮の参拝者が伸び悩んでいること。鳥居前町が個性乏しい一般商店街化したためか、それとも参拝客の交通手段が鉄道利用より観光バスやマイカーに代わったせいか、外宮の参拝客及びその鳥居前町利用者が減ったことは事実。1960年代半ば頃までは参拝客数で外宮の方が内宮より多いか、または同等だったものが、2005年には内宮407万人に対し、外宮138万人、06年には内宮473万人に対し、156万人とほぼ３倍の差をつけられている。それを解消するには魅力ある商店街、鳥居前町を形成して人を呼び寄せることで、それには宿泊施設も必要だ。このため民間出資によって、JR伊勢市駅前のショッピングセンター跡地にホテルの建設が進められている。

５　往時をしのばせる伊勢河崎商人館

外宮参りの帰途に立ち寄ってもらいたいのは「伊勢河崎商人館」とその街並み。水運華やかな時代の問屋町の風情を色濃く残している。両駅から徒歩15分北方に行ったところで、案内標識が少なくて分かりにくいが、付近の人に尋ねればすぐ教えてくれる。なにしろ戦国末期には物資の集積場が形成され、江戸時代には、両宮への参拝客を宿泊させる宇治、山田地区旅館街に食品、衣料品を供給するための一大問屋街に発展、幕府の山田奉行所が米と魚の卸売り専売権を与えたこともあって、繁栄振りは「伊勢の台所」と呼ばれるほど。戦後、水運がトラック輸送に変わるにつれ、同地区は衰退の道をたどるが、それでも古い商家建築、土蔵が数多く残されており、そのまま営業を続けている店も多い。その一軒、和具屋を訪ねた。元禄年間創業の陶磁器問屋で、母屋と土蔵は1757年（宝暦７年）の建築。入り口から蔵まで64mあり、いつの頃のものか、運搬用のトロッコとレールがそのまま残されている。店舗はというと、まるで近世の民具資料館。幕末、明治の陶磁

「伊勢の台所」といわれた河崎の問屋街。川の改修で雰囲気は変わったが古い商家や蔵が昔の面影を残している。

器や漆器、錦絵、道具類が雑然と積み上げられ、その隙間をぬうように商品らしき陶磁器が顔をのぞかせる。いっそ、有料資料館にした方が良いのでは、と15代目当主の大西佐一さん（63歳）に伺う。大西さんいわく「今でも答志島や菅島の雑貨商はうちから仕入れていく。客がある以上やめられん」と意気盛ん。実はこの問屋街、勢田川の改修工事とともに、一軒、また一軒と壊されていく運命にあった。それを救ったのは住民の熱意だった。町並み保存を訴えた結果、伊勢市が老舗の酒問屋、小川酒店の用地2,000㎡と店舗、蔵など建物12棟を買収し「伊勢河崎商人館」（国の登録有形文化財）として2002年に開館した。運営は地元のNPO法人「伊勢河崎まちづくり衆」が担当する。西城利夫事務局長は「用地を含めて規模を拡大する計画を進めており、県外からどんどん来てほしい」と要望する。一見する値打ちは十分ある。

Ⅱ　伊勢市の目指すところ

1　財政厳しいなかで「誇りをもてるまち」

伊勢市は、2005年（平成17年）11月に旧伊勢市、二見町、小俣町、御薗村の４市町村が合併して誕生した。三重県中東部に位置し、面積208.53㎢、人口約13万5,000人の新市で、北は伊勢湾、中央には宮川、五十鈴川、勢田川が流れ、温暖な気候と緑したたる歴史豊かな景勝の地である。古くから伊勢神宮の鳥居前町として多くの参宮客を迎えてきたため、第１次産業従事者3.7％、第２次産業従事者29.5％に対し、サービス産業を中心とする第３次産業従事者が65.7％と多いのが特徴である。観光が地域の主要産業であるにもかかわらず、クルマ社会の到来、娯楽の多様化、観光地間競争の激化などで伸び悩んでいる。参宮客数そのものは、両宮合わせほぼ700万人をキープし、遷宮年の1973年（昭48年）は860万人、同1993年（平成５年）は840万人を迎えるなど大きな落ち込みはないが、交通手段の多様化によって日帰り客が年々増え、宿泊客が旧伊勢市で28万人、旧二見町で18万人（いずれも07年）と漸減傾向にあるのが悩みだ。とくに二見町の場合、1955 ～ 65年頃には50万から70万人もの宿泊客があっただけに落ち込みは激しく、観光産業を直撃する。

それにもまして厳しいのは財政事情。伊勢市は元々財政基盤が脆弱な上、合併にともなう格差是正のための財政負担が生じた。合併後の２年間は過去の余剰金を積み立てた財政調整基金を取り崩すことなくやり繰りしてきたが、今後は市税、地方交付税はじめ歳入が大きく伸びることは期待できない見込みで、財源不足が生じる見通し。このため経費の削減、行政のスリム化で歳出を削減し2010年度にはプライマリー・バランス（基礎的な財政収支バランス）を黒字に持っていく計画。就任３年目の森下隆生市長は「（歳出削減で）将来にわたって持続可能な行政サービスが提供できるように改革するとともに、伊勢市民が誇りを持てるまちづくりをしていく」とし、重点施策６項目を掲げ、第62回式年遷宮に向けた取り組み、鳥羽、志摩を含めた観光の広域化、産業の振興と企業誘致など、税収増を図るための施策を展開していく。

2　伊勢の顔づくり

伊勢市にとっての最大課題は、５年後の式年遷宮に向けての体制づくり。とりわけ伊勢市の顔ともいえるJR伊勢市駅前・山田地区と二見浦の魅力アップが緊急課題であり、２つ目は渋滞するこ

となくいかにスムーズに観光客を誘導するかである。2003年（平成15年）の正月には最長13kmの自動車渋滞を招いた苦い経験があり、次回の式年遷宮に向け、早めに十分な計画を作る予定である。パーク＆バスライド、パーク＆サイクル、中部国際空港からの海上アクセスの向上などである。また外宮の鳥居前町である伊勢市駅周辺の道路、公園、街路を整備して駐車機能の強化、外宮へのスムースな歩行ルートを確保するとともに、宿泊機能を強化するため、民間活力を活かしたホテルの建設を誘導する。また二見浦地区では、宿泊機能を高め、商店街の魅力アップを図る。これら伊勢市単独で事業を進めると同時に、周辺地域と連携した広域観光戦略を練っており、鳥羽市、志摩市などと委員会を立ち上げており、伊勢志摩観光全体の付加価値を高めていく。

３　景観への取り組みは早い

伊勢市の景観計画に対する取り組みは、1901年（明治34年）にさかのぼる。伊勢市というより、政府主導の都市計画事業として計画され、同年には神宮周辺の建物の高さを30尺（９m）以内に制限した「屋舎制限令」が発令された。さらに1936年には3,000haの風致地区設定、1940年には両宮連絡道路の美化保全など、「神宮関係特別措置法」（通称神都計画）に基づく政府直轄事業として行われた。残念ながら戦争で中断したが、それでもこうした法律による強制力があったからこそ、神宮周辺の良好な環境と威厳が保たれたといえる。最近では、旧伊勢市が1989年に「伊勢市まちなみ保全条例」を制定し、内宮おはらい町を、また2001年には旧二見町が「二見町の景観・文化を守り、育て、創る条例」を制定し、茶屋地区の景観形成に取り組んできた。

４市町村合併を契機に、景観法に基づく、伊勢市全域を景観計画区域と定めた伊勢市景観計画を新たに策定し、条例化することになった。策定中の伊勢市都市マスタープランにより、地域の特性及び重要性を踏まえ、地区を一般地区、沿道景観形成地区、重点地区に分け、建築物の形態の誘導を行う。2009年３月市議会に提案し、同10月以降に全面施行する予定である。

■　感想

三重県は、かつての伊勢、志摩、伊賀、紀伊国の一部から成り立っている。自然条件、風土、歩んだ歴史ともそれぞれ大きく違っているが、早くから大和政権の影響を受けたため歴史豊かで、その遺産も多い。伊勢国の場合、温暖な気候に恵まれ、肥沃な伊勢平野を持って早くから農業、漁業、海運業が発達した上、天皇の先祖を祀る伊勢神宮が置かれたことで古代、中世、近世の長い期間にわたって繁栄が約束されてきた。神宮は、幕府、藩に支配されることなく土地と統治権を確保できたし、また住民が自分達の自治的組織で治めてきたためである。その上、早くも鎌倉時代には庶民の伊勢参宮が始まり、江戸期に至ると「おかげ参り」という爆発的な集団参宮現象が起こって、多い時には１日に23万人が押し寄せたとの記録もある。そのおかげ参りの再来を期待しているのが三重県であり、地元伊勢市である。伊勢市は、前身の宇治山田町が1906年に市制施行した歴史ある市。歴史遺産や資料館、博物館が多くて、とても１日や２日で回り切れないほどだが、現代的な宿泊施設が整っていないせいか、伊勢市に宿泊せず、志摩を最終目的地とする、立ち寄り型観光地化していることは残念でならない。食べ物についても、海の幸、山の幸に恵まれている上、餅菓子、生姜糖など名物は多い。

参考文献

(1990)：「おかげまいりとええじゃないか」（岩波新書）
(2000)：「三重県の歴史」（山川出版社）
(2006)：「検定お伊勢さん公式テキストブック」（伊勢商工会議所）
(2007)：「三重県の歴史散歩」（山川出版社）

市長インタビュー

伊勢市長　森下隆生氏に聞く

コメント「第62回式年遷宮は、全国はもとより外国からも来ていただくため、万全の体制でお迎えする。」と森下市長。

略歴

1969年４月	旧日本鋼管津造船所入社
1979年３月	同退職
1981年３月	大阪工業大学短期大学部建築学科卒業
1983年１月	森下建築企画室開設
1987年５月	伊勢市議会議員就任
1999年３月	３期務め、辞職
2003年４月	三重県議会議員就任
2006年３月	同辞職
2006年４月	伊勢市長就任

三重県出身、58歳

―ご遷宮まで５年を切りました。お木曳き行事などで伊勢市は盛り上がっていると聞いています。

森下　伊勢市は20年ごとに、市民全員が式年遷宮に取り組み、平成25年（2013年）には第62回を迎える。全国はもとより、外国からも来ていただくため、万全の体制でお迎えし、満足していただきたいと考えている。課題は山積しているが、行政として真っ先に解決しなければならない問題は、駐車場の確保と交通渋滞の解消。昨今、公共交通機関より、自動車での来勢が増えており、前回（1993年）はせっかく伊勢自動車道を整備したのに出口で渋滞を引き起してしまい、伊勢西インターチェンジから13㎞も渋滞したことがある。５時間、６時間と車中に閉じ込められることになり、それこそ大変な批判を浴びた。また内宮前のおかげ横丁が整備されたことから、多数の観光客に来ていただき、クルマの滞留時間が大幅に延びて、慢性的な駐車場不足を引き起した。今回はそうした反省に立って交通問題を最優先課題にしている。解決策としてはパーク＆バスライド・システムを活用したい。遠く離れた駐車場にクルマを止めていただき、専用バスで回ってもらう。2009年11月の宇治橋の架け替えに始まり、今後毎年行事が予定されており、観光客はどんどん増えると思われるので、万全の準備を整えていく。

―遷宮は伊勢市というより三重県全体にとっての最大の式典であり、イベントです。どんな経済効果を期待しますか。

森下　人に来ていただくことを最優先に考えている。それに合わせてハードをリニューアルして、参拝客を迎える環境を整備する。2013年は、両宮合わせて１年間に1,000万人の人に来ていただけると期待している。過去の実績は、1973年（昭48年）が859万人、1993年（平成５年）が838万人と、まだ1,000万人の大台にのったことはないが、今回はPRに力を入れると同時に、1,000万人を前提とした仕掛けをしていきたい。１年365日で割ったら、１日当り２万8,000人という計算になる。しかし実際には正月とか、重要な儀式のあるときに集中すると思われる。それと内宮前の内宮おはらい町に「おかげ横丁」を整備し、一新したため、観光客が通年にわたって来ていただくようになり、地元として、また観光業者も助かっている。内宮おはらい町の整備は、「なんとかせないかん」と再生意見が出てから、1993年（平成５年）の開業にこぎつけるまで14年間かかった。その効果でおはらい町を散策する観光客が年間300万人を超え、賑わいを取り戻した。

―内宮に比べ外宮の参拝客は少ないですが…。

森下　課題は外宮である。外宮の前の街が寂しくなってしまって、両宮の参拝客のバランスが悪くなってしまった。戦前は外宮の方が多かったし、戦後も昭和40年頃まではほぼ同数だった。それが今では内宮の３分の１となっている。だから第62回式年遷宮までには外宮とその周辺を重点的に整備しようということで、現在仕掛け作りを急いでいる。すでに参道整備は終了したし、これからはJR伊勢市駅前広場の整備に取り掛かる。地元商工団体から参道入り口に白木造りの常夜灯が献納されたほか、神宮側でも、外宮の勾玉（まがたま）池のほとりに資料を展示する遷宮記念館（仮称）を建て、参拝者または市民の皆さんに集っていただくように計画が進められている。展示する資料も豊富で、楽しく学んでいただける記念館になると期待できる。

―政府は2010年までに訪日外国人旅行客数を1,000万人に倍増する目標を掲げました。聖地であり、観光地である伊勢市に期待がかかります。

森下　私は、今こそ日本の良さが求められている時代だと思う。その日本の良さの原点が伊勢市にあり、日本人及び伊勢神宮が2,000年間にわたって大切にしてきたものを世界の人に見てもらって、感じてもらうチャンスだと考える。自然との共生というか、日本はどのように自然環境を守りながら、自然の恵みを得て、自然とともに暮らしてきたか、神宮の森、神宮農業館を見てもらえば理解してくれるはず。世界中の人々が環境問題で苦しんでいる今こそ、出番だと思う。また我々も自然との共生の大切さを積極的に世界に発信していく義務がある。幸い外国人観光客がここ数年増えており、喜んでいる。外国人の方にも神宮の静かなたたずまいの中で、安らぎなり、癒し、を十分感じてくれると思う。誘客事業も大切であり、観光客を７人誘客すると、住民１人に匹敵する経済効果があると聞いている。定住人口が伸びない中、今後はアジア、特に台湾や中国からの誘客に積極的に取り組みたい。

それと行政的には、４市町村合併で、広域的な観光振興策が打ち出せるようになり、相乗効果が発揮できる。旧二見町を例に上げると、合併前はお互い別々に観光振興策なり、施設整備をするなどしてきたが、これからは二見の観光資源を含め新伊勢市としての振興策が立てられる。神宮参拝客に、二見地区の旅館街に宿泊してもらい、夫婦岩を始めとする海岸線の美しさを堪能してもらえば観光客にとっての楽しみも倍加するはずである

―景観についての考えを聞かせて下さい。

森下　今年３月景観行政団体になったので、それを受けて2009年には景観計画と条例を施行するように準備を進めている。全市を対象として、地区ごとに一般地区、沿道景観形成地区、重点地区として位置付け、必要な制限を設けて良好な景観を守りたい。全国から来ていただく式年遷宮のお客様に、「さすが、お伊勢さんのある町」、と評価されるような美しい景観を作っていきたい。一番気に掛かるのは国道を始めとする道路沿いの屋外看板や電柱看板である。電柱の地中化はお金がかかるから簡単には実施できないものの、看板だけはなんとかしたい。例えば内宮―二見間。看板が少なくて、電柱看板がなければすばらしい緑と海の景観を楽しんでもらえる。

景観事業においての課題は河崎地区問屋街の修復保全。勢田川を利用した水運で早くから拓け、伊勢の台所と言われたほど栄えたところであった。老朽化で古い建物が姿を消しているが、江戸時代を思わせる豪壮な建物が多く残されており、市としてはなんとか保存していきたい。神宮とはまた違った魅力があり、観光客には興味を持ってもらえると思う。伊勢市に来てもらったら、これらの観光スポットを自動車ではなく、歩行か、自転車で回ってもらいたい。内宮―外宮は５㎞、内宮と二見は10㎞、外宮と河崎地区は１㎞と、全てが近い位置にある。

―観光振興と同時に、企業誘致を積極的に進めておられます。

森下　ご存知のように、経済が停滞する中、地方は少子高齢化時代を迎えることになり、負担が重くのしかかる。伊勢市が観光を基幹産業として大切にしていくことは確かだが、それ以外にも雇用を確保し、税収を増やしていく方法を考えるのは当然のこと。それには既存企業の体質強化と企業誘致による活性化が必要であると判断した。このため新たに伊勢市産業支援センターを今年４月に設置し、地域産業の支援や起業化促進、企業連携などを進めるほか、支援センターの隣接地に、「サン・サポート・スクエア伊勢」という名称の企業用地を用意した。「環境と健康」をキーワードに企業を募集している。用地取得費補助などインセンティブを用意しているのでどんどん申し込んでほしい。

―最後に言わせていただきたいのは伊勢市の食文化です。食材に恵まれているのに代表的な食べ物がうどん、たくわんというのはいかにもさみしい。

森下　十分承知している。好み、趣向が多様化した時代に、昔ながらの食べ物だけでなく、全国に売り出せる、新しい伊勢名物になるものとして、観光活性化プロジェクトの中で民間の協力を得て準備を進めている。

―ありがとうございました。